

〔原 著〕

子育て期にある香港人家族の家族機能のエスノグラフィー —家族機能遂行の方略に焦点をあてて—

本田 順子¹⁾ 法橋 尚宏²⁾

要 旨

子育て期にある香港人家族がどのような家族機能を果たしているかをエスノグラフィーにより明らかにし、日本人家族への示唆を得ることを本研究の目的とした。参加観察、インタビュー、統計資料・書籍から、子育て期にある香港人家族の家族機能に関するデータを収集した。

データ分析により、11のカテゴリーが抽出された。家庭内外労働の負担は夫婦間で均衡化し、夫婦が共同で役割を遂行していた。一方、夫婦だけでは遂行できない育児や家事労働は夫婦外へ委譲しており、親族ネットワーク、住み込みのアマ（外国人家事労働者）、外食産業などの外部資源の活用によって家族機能を補完していた。少産により子どもの数が減少し、過熱する早期教育への取り組みがみられ、家計を圧迫する住居費・教育費の負担があった。生活を維持するための最低限の住居環境で生活しており、日常生活で健康意識が散見されるが、生活習慣・環境に起因する健康問題を抱えていることが明らかとなった。娯楽は居宅内を中心として享受していた。宗教については、現実生活のために利用しているが、低い宗教意識からくる宗教の形式化がみられた。

核家族化・晩婚化・少子化・女性の労働参与が日本よりも進行している香港人の家族機能のありようと照らし合わせると、日本人家族においても、家庭内外労働の夫婦間での均衡化、夫婦だけでは遂行できない役割の夫婦外への委譲を検討していきたい。

キーワード：家族機能，香港，通文化研究，エスノグラフィー，子育て期

1. はじめに

近年、わが国では、核家族化・少子化による家族規模の縮小、地域共同体の崩壊による核家族の孤立¹⁾などにより、良好な家族機能レベルの維持が難しくなっている。さらに、女性の家庭外就労の増加、個人化の進展は、家族が危機に対処して動員しうる人的資源を減少させることにより家族の危機対処能力を弱め、子育てなどの機能を弱化させている²⁾。このように、子育て期にある家族の家族機能の評定とそれを維持・向上するための支援が求められている。

家族は社会や文化と交互作用しており、家族をアセスメントするには文化背景も考慮しなければならない³⁾。そこで、通文化的な質的研究から家族機能遂行のありようを明確にできると考え、日本と同様な社会変化に直面している中華人民共和国香港特別行政区（以下、香港）に着眼した。香港は、歴史的背景から西洋文化の影響を受け、中国の伝統文化と混在した独自の文化をもつ⁴⁾。また、香港では核家族化・晩婚化・少子化・女性の労働参与が日本よりも進行しており、これらの最近の統計データの動向をみると、日本も将来は現在の香港と同じ情勢になるかも知れない。なお、香港では、核家族は66.2%、平均初婚年齢は男性32.1歳、女性30.0歳（以上、2001年）⁵⁾、合計特殊出生率は0.94、女性の労働参加

1) 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻

2) 神戸大学医学部保健学科小児・家族看護学分野

率は25歳以上29歳以下では87.1%, 30歳以上34歳以下では76.6%, 35歳以上39歳以下では68.9%である(以上, 2003年)⁶⁾。

以上から, 子育て期にある香港人家族がどのように家族機能を遂行しているのかを質的に明らかにし, それをもとに日本人家族への示唆を得ることを本研究の目的とした。質的研究法として, 多次元的要素を包括的に取り扱い, 文化集団が行っていることの原因を理解し, 記述するためのエスノグラフィー⁷⁾を採用した。

II. 対象と方法

1) 対象とデータの収集方法

2002年7月から2005年11月に, 参加観察, フォーマル・インタビューとインフォーマル・インタビュー, 統計資料・書籍から, 子育て期にある家族(養育期の子どもがいる家族と操作的に定義)の家族機能に関するデータを収集した。

参加観察は, 家族機能の遂行に焦点をあて, 家族が家族内に果たす役割と家族が社会に果たす役割に注目しながら³⁾, 家族の生活の場である自宅と家族と関係のあるフィールド(職場, 教育・保育機関, 生涯学習施設, 保健・医療・福祉施設, 利便施設, 教養・娯楽施設, 宗教施設など)で行った。フィールドの視察から始まり, 家族や現場関係者との会話・会食・娯楽, ボランティアによる運営支援・相談などにより信頼関係を築き, フィールドに参加しない観察者⁸⁾というレベルからフィールドへの関与の度合いを上げ, 完全な参与⁸⁾ができるレベルになった時点で, どういったデータをとりたいかという点を考慮してフィールドへの関与の度合いを決め, 最も適切であると思われる立場で参加観察を行った。見聞きしたもの, 観察者の印象や感想なども含めてメモを取り, 写真撮影や絵を描くことで視覚的なデータも収集した。これらすべてをまとめてフィールドノートを作成した。なお, 倫理的配慮については, 現場責任者に研究の主旨, 匿名性の保持と本研究の

目的以外にデータを使用しないことなどを口頭で説明し, 参加観察の許可を得た。さらに, 現場関係者をはじめ多くの人と接触するため, 自己紹介や研究の主旨の説明をその都度行って不審を抱かれないように配慮するとともに, データの管理と個人情報の保護を遵守した。

インタビューについては, 参加観察や既存の文献・資料⁵⁾⁶⁾⁹⁾⁻¹¹⁾などをもとに家族機能に関するインタビューガイド(情緒, 生殖, 養育, 住居, 経済, ヘルスケア, 休息, 娯楽, 宗教の機能から構成し, 家族が家族内に果たす役割と家族が社会に果たす役割を明らかにする項目)を作成し, 半構成面接を実施した。対象者は, スノーボールサンプリングにより選定した香港在住の子育て期にある香港人家族, 参加観察の現場関係者(会社員, 教員, 看護師, 医師, ソーシャルワーカーなど)とした。研究の主旨, 匿名性の保持と本研究の目的以外にデータを使用しないことなどを口頭で説明し, 研究への参加同意が得られた対象者に対して, 必要に応じて香港人の同時通訳者2名が同席のもとでインタビューを実施した。その内容は許可を得て録音し, 日本語の逐語録を作成した。

統計資料・書籍については, 香港政府統計處出版の統計資料⁵⁾⁶⁾, 香港政府のWeb, 香港大学図書館所蔵の書籍・文献¹²⁾⁻¹⁶⁾, 日本で出版されている書籍⁹⁾¹⁰⁾などから必要事項を抽出した。

2) データの分析方法

フィールドワークの過程で, 参加観察や統計資料・書籍から得られたデータをインタビューで確認し, インタビューで得られたデータを参加観察や統計資料・書籍で確認しながら, 複数の技法を組み合わせ多角的にデータ収集を行うことで, データの妥当性を高めた。

フィールドノーツ, 逐語録, 統計資料・書籍をデータとした。すべてのデータを理解可能な最小単位の言葉や文章ごとにオープンコード化し, 家族機能に焦点をしばったコーディングをへて, 共通の内容をもつものを集めてカテゴリーを組んだ。さらに, カ

テゴリー内とカテゴリー間の関係性を理由や背景などに着目して統合した。この過程から、家族機能遂行の方略というテーマにそって、内容やその意味、背景、手段に着目して、カテゴリーを再統合した。研究プロセスおよび分析内容に関して、香港人家族を研究している日本人6人と中国人1人でカテゴリーについて合意が得られるまで検討を重ねた。

III. 結 果

香港への渡航は合計7回で、フィールドワークは延べ55日間行った。なお、インタビューの対象のうち、スノーボールサンプリングにより選定された子育て期にある香港人家族は7家族であり、居住地は香港の全エリア（香港島は1家族、九龍は2家族、新界は4家族）にわたっていた。夫の年齢は34.7±

5.8歳（範囲は27歳から47歳）、妻の年齢は32.6±7.3歳（範囲は24歳から44歳）、共稼ぎ家族は7家族中4家族であった。家族の年収は、平均380,100±285,900香港ドル（約532.1万円）で、範囲は168,000香港ドル（約235.2万円）から1,000,000香港ドル（約1,400.0万円）と幅広い収入階層を含んでいた。子どもの数は1.14±0.36人（範囲は1人から2人）、子どもの年齢は5.3±4.5歳（範囲は0歳から11歳）であった。このフォーマル・インタビューの所要時間は、1家族につき101.42±32.1分（範囲は52分から143分）であった。

フィールドワークで得たすべてのデータを包括的に分析した結果、11のカテゴリーが抽出された（表1）。カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、対象者の言葉は「」を用いて記述した。

表1. 子育て期にある香港人家族の家族機能

カテゴリー	サブカテゴリー
【出生力の抑制による少産】	『晩婚化・晩産化にともなう少産』『親の希望による出生力減退』
【夫婦以外の人手による子育ての補完】	『信頼できる親族と連携した子育て』『外国人家事労働者が従事する子育て』『近隣住民から孤立した子育て』
【過熱する早期教育への取り組み】	『幼稚園からの早期教育の提供』『過熱した学校外教育の展開』
【夫婦間で均衡化した家庭内外労働の負担】	『共稼ぎの一般化による生活の維持』『夫婦間で均衡化した家事労働の負担』
【家事労働の夫婦外への委譲】	『家族員化するアマによる家事労働』『炊事の夫婦外への委譲』
【家計を圧迫する住居費・教育費負担】	『家計を圧迫する住居費の負担』『教育へ的高額な投資』
【生活を維持するための最低限度の住居】	『高層化・高密度化した共同住宅での暮らし』『照度の低い光環境での暮らし』『核家族化を余儀なくする狭小住居』
【居宅内を中心として繰り広げる娯楽の享受】	『視聴覚メディアを使った居宅内中心の娯楽の享受』『居宅外での家族との娯楽の共有』
【低い宗教意識からくる宗教の形式化】	『無宗教であると自認』『宗教を現実生活のために利用』
【日常生活で散見される健康意識】	『日常生活に取り入れられた健康増進活動』『老親に対する健康的配慮』
【生活習慣・環境に起因する健康問題の保有】	『生活習慣に起因した子どもの健康問題の保有』『大気汚染に起因した健康問題の保有』

【出生力の抑制による少産】

平均初婚年齢は、1991年に男性30.5歳、女性28.2歳であったが、2001年に男性32.1歳、女性30.0歳となり、晩婚化が進行していた。高学歴化と女性の労働参与の増加がその背景にあった。また、合計特殊出生率は1991年では1.28、2001年では0.93であり、顕

著に低下していた。第1子をもつ年齢が上昇し、再生産期間が短縮することにより少産をもたらし、『晩婚化・晩産化にともなう少産』が認められた。統計では1家族あたりの子どもの数は1.5人であり、インタビューの対象者家族においても1.14人と少なかった。次子の計画に対しては「もう十分」「お金

がかかるから」「子どもの世話は大変だから」と、1人か2人の子どもを望んでおり、『親の希望による出生力減退』が起きていた。

【夫婦以外の人手による子育ての補完】

アマ（外国人家事労働者）が約22万人おり、最低賃金は月額3,320香港ドル（約46,480円）と安価に規定されているので、子育て期では「40%くらいの共稼ぎ家族がアマを雇っている」実情があった。アマの主な業務は家事労働と育児であるが、「他人は信用できない」「他人に子どもを世話してもらうより親族の方がいい」と親族に子どもをあずけたいという思いが強く、アマの最低賃金よりも高額な養育費を両親に支払う夫婦もいた。また、近隣に住むきょうだいやから育児サポートを受けている夫婦や、子どもは夫婦の両親と同居し、休日にのみ両親宅へ子どもに会いに行くという夫婦もあり、『信頼できる親族と連携した子育て』を希望していた。両親が有職、高齢、他界などの理由で、両親からのサポートが得られない夫婦はアマを雇い、『外国人家事労働者が従事する子育て』にならざるを得なかった。一方、「子どもの世話をするから」という理由で就業せずに子育てに専念する妻がおり、「隣とは挨拶だけ」「近所の人と関係はない」「近所からの支援は考えていない」と近隣との関係が希薄化する中で、『近隣住民から孤立した子育て』をしていた。

【過熱する早期教育への取り組み】

統計では95%の子どもが就学前教育に参加しており、89%が幼稚園に通園していた。イギリス領であったという歴史的背景から英語教育が盛んであり、中国返還後は中国語（普通話）教育も取り入れられ、幼稚園から語学教育を行っていた。また、「幼稚園は勉強をするところ」という認識があり、算数や理科などの学習時間もあり、『幼稚園からの早期教育の提供』があった。さらに、宿題もあるので、「（毎日）娘の宿題を確認します」というように、母親は日々の子どもの学習を支援していた。また、学習塾に通う子どもも多く、『過熱した学校外教育の展開』がみられた。

【夫婦間で均衡化した家庭内外労働の負担】

インタビューの対象者家族の中で共稼ぎ家族は57.7%であり、有職である妻の雇用形態は全員が常勤で、深夜までの長時間労働をしていた。その共稼ぎ家族では、夫の年収は158,000±55,281香港ドル（約221.2万円）、妻の年収は157,750±59,500香港ドル（約220.9万円）であり、夫婦の賃金格差はなかった（労働者の月収の中央値（2003年）は10,000香港ドル）。「香港ではたいていが共稼ぎです」「1人の給料では家族を扶養できない」というのが共稼ぎの理由であり、『共稼ぎの一般化による生活の維持』が行われていた。性差が少ない労働条件であるため、家事労働においても「（仕事）休みの方がする」と夫婦が平等に分担しており、『夫婦間で均衡化した家事労働の負担』になっていた。また、妻が無職の場合でも夫が食事準備や掃除を分担するなど、夫が家事に参加していた。

【家事労働の夫婦外への委譲】

アマは住み込みが一般的であり、家族員のように育児や家事に従事していた。雇い主である家族は、アマの仕事の質を向上させるためにアマとの関係を良好に保ちたいと考えており、「アマは家族だ」と認識し、『家族員化するアマによる家事労働』がみられた。「仕事があるから子どもを育てる時間がない」と、アマに育児を任せて就業することに抵抗がない家族も少なくなかった。アマを雇用している家族ではアマが毎日の食事を準備するが、アマを雇用していない家族は「休日の夜だけ作る」程度で、平日のほとんどは外食で済ましていた。中華料理をはじめとする飲食店が遍在し、外食への抵抗感が弱いので外食産業が一般化していた。専業主婦であっても「食事を作るのが嫌い」「（外食しても）安い」という理由で外食しており、『炊事の夫婦外への委譲』が行われていた。

【家計を圧迫する住居費・教育費負担】

統計で家計支出をみると、低所得者層では家賃が29.5%（あるいは住宅ローンが45.0%）、高所得者層では家賃が15.0%（あるいは住宅ローンが23.0%）

を占めていた。「香港では家が一番の問題」というように家計支出で住居費が占める割合が高く、『家計を圧迫する住居費の負担』があった。また、前述の【過熱する早期教育への取り組み】にともない、保育料や学費だけでなく、学校外教育やより充実した教育機関に子どもを入学させるために『教育への高額な投資』をしていた。

【生活を維持するための最低限度の住居】

人口密度(2001年)が高く、例えば、觀塘は49,861人/km²、黃大仙は47,810人/km²であった。立ち並ぶ高層マンションに核家族が集積しており、『高層化・高密度化した共同住宅での暮らし』をしていた。2段階ベッドで寝る空間を確保したり、リビングに子どもの学習机を設置したりと、狭い居住空間で生活していた。ベランダがないのが一般的で、洗濯物は室内や室外の共用廊下で干したり、窓から長い竿を伸ばして干していた。高層マンションが密集しているのが日当たりが悪く、照明も暗く設定されていることが多く、『照度の低い光環境での暮らし』をしていた。また、平均世帯人数は1986年では3.7人、2001年では3.1人、核家族の割合は1981年では54.4%、2001年では66.2%であり、核家族化が進んでいた。インタビューの対象者家族はすべてが核家族で、「家が狭いから」という理由で大家族と一緒に住むことが難しく、『核家族化を余儀なくする狭小住居』であった。

【居宅内を中心として繰り広げる娯楽の享受】

居宅内では「テレビやDVDを観る」「ゲームをする」ことで余暇を過ごすことが多く、『視聴覚メディアを使った居宅内中心の娯楽の享受』をしていた。一方、休日は「家族でショッピング」「子どもと公園」といった外出に加え、草原や岩山でのハイキング、周辺の島々での海水浴やサイクリングなどもしており、『居宅外での家族との娯楽の共有』がみられた。

【低い宗教意識からくる宗教の形式化】

仏教、道教、基督教、儒教などがあるが、「信仰している宗教はない」というように『無宗教であると自認』する家族が多かった。無宗教といいながら

も、玄関に祭壇が設けてあったり、室内に風水関連物が飾られていたり、「風水を信じてよく引っ越しをします」「ビジネスマンは風水が好き」との発言がみられた。店舗内や通りで見られる祭壇、寺院で熱心に礼拝する姿から信仰心も見受けられ、『宗教を現実生活のために利用』していた。

【日常生活で散見される健康意識】

西洋医学以外に伝統中国医学が根付いており、両者が用いられていた。風邪などのときに飲む漢方薬入りのお茶(感冒茶)、健康に良いとされる漢方薬入りのゼリーなど、伝統的な健康食品を販売する店舗が多数あった。「スポーツジムに通っている」ことや、早朝の公園で主に高齢者が太極拳をしていることなどから、『日常生活に取り入れられた健康増進活動』がみられた。また、別居している『老親に対する健康的配慮』がみられ、頻繁かつ定期的に両親宅を訪問したり、両親宅の近所に居住している家族もあった。

【生活習慣・環境に起因する健康問題の保有】

衛生署の報告では、子どもの健康問題として肥満、う蝕、視力異常があげられ、『生活習慣に起因した子どもの健康問題の保有』がみられた。また、香港では大気汚染が社会問題となっており、毎朝のニュースで空気汚染指数が報道されるなど、大気汚染に対する関心が高かった。大気汚染の原因として、交通量が多く、タクシーなどの自動車に使用されている燃料の多くがディーゼルであること、高層ビルが多く空気の流れが悪いことがあった。『大気汚染に起因した健康問題の保有』が指摘されており、慢性呼吸器疾患による死亡率(人口10万対)は30.0で、日本の10.8に比べて約3倍であった。

IV. 考 察

1. 子育て期にある香港人家族の家族機能遂行のありよう

香港には、男は外、女は内という伝統的な「男主外女主内的分業」の考えがある⁹⁾が、共稼ぎという

ライフスタイルにあわせて夫婦の役割の均衡化が図られているといえる。また、育児や家事を夫婦外に委譲することに抵抗感が弱いので、夫婦だけでは遂行できない役割を住み込みのアマなどが担当することで家族機能を遂行しているという特徴がみられた。以下では、大橋の家族機能の分類¹¹⁾にもとづいて諸機能を考察していく。

1) 生殖機能, 養育・教育機能

合計特殊出生率が顕著に低下しており、抜本的な少子化対策が急務といえる。親族ネットワークやアマの存在があるので、養育・教育機能が確保できないために少産になるのではなく、晩婚化・晩産化と夫婦の希望から少産が生じていると考えられる。

育児は夫婦外に委譲しているが、子どもの教育への関心は強い。家事労働を外在化することで、教育に時間をかけやすいと考えられる。しかし、とくに労働階級の母親は子どもの学業成績が高いことを重視しており¹³⁾、子どもの情操面の発達に注目することが少ないのが懸念される。

2) 経済機能

夫婦の賃金格差がほとんどなく、香港人の最大の関心事は自己の利益と経済的利益⁴⁾であることから、共稼ぎ家族が多くなっていると考えられる。また、夫婦の労働条件には差が少ないので、夫婦の役割負担も均衡化していると考えられる。ただし、炊事は妻の就労の有無を問わず、外食産業に委譲している部分が多い。外食産業の一般化は、香港庶民の伝統的な飲茶の習慣や、狭い土地柄のために店舗が必要でない屋台、弁当屋、仕出し屋が香港の食の代表であった¹⁷⁾という歴史的背景からも理解できる。

また、1人あたりの国民総所得は26,660米ドルで、世界27位(2004年)と高いが、10人に1人は貧困ライン以下であり¹⁸⁾、所得格差を示すジニ係数⁵⁾は0.525(2001年)である。ジニ係数が0.5以上は、特段の事情がない限り早急な是正が必要な状態であり、香港は貧富の差が激しいといえる。したがって、経済格差が家計の支出の多くを占める住居費と教育費に反映され、住居機能や教育機能の遂行に影響すると考

えられる。

3) 住居機能

香港の人口密度は、東京都23区(2004年)の13,606人/km²に比べても極めて高く、生活を維持するための最低限度の住居が余儀なくされ、それが核家族化の要因になっていると考えられる。窓から長い竿を伸ばして洗濯物を干している光景は香港の生活風景を代表するものであるが、これは狭い居住空間で家族が生活するための知恵ともいえる。

4) 娯楽機能

とくに平日は、夫婦共稼ぎで長時間労働なので娯楽の時間は確保しにくく、居宅内で娯楽を享受することになると考える。ただし、テレビやDVDの鑑賞が中心であり、家族の会話が促進されにくいと考えられる。一方、休日には家族揃って外出しており、貴重な家族団欒の時間になっていると思われる。

5) 宗教機能

日常生活の中に形式化した宗教が浸透し、一見すると信仰心が厚いように見受けられる。しかし、宗教意識は高いとはいえず、現実生活のために宗教を利用していることが明らかになった。日本の現代社会においても家族宗教が弱まったと指摘されており¹¹⁾、日本人と同様に香港人家族が宗教活動を行う機会は少ないといえる。

6) 保護機能

伝統的な親族維持・団結の観念⁹⁾から親族ネットワークが維持され、伝統的な習慣が継承されやすく、伝統中国医学にもとづいた健康増進行動が生活に根付いていると考えられる。一方で、現代の生活習慣・環境に起因した健康問題が発生しており、ライフスタイルや環境汚染対策を見直す必要がある。また、2003年のSARS(重症急性呼吸器症候群)の蔓延は、下水設備の不備、狭いアパートの密集、エレベーターなどのような公共の場所での人との接触が原因であった¹⁹⁾。これを契機に各所の衛生状態が改善され始めており²⁰⁾、家族の保護機能の向上も期待される。

2. 子育て期にある日本人家族の家族機能への示唆
同様な社会問題に直面している日本と香港ではあ

るが、家族機能を遂行するための方略に相違がみられた。日本の女性の労働参加率は、25歳以上29歳以下では74.0%，30歳以上34歳以下では61.4%，35歳以上39歳以下では62.4%（2004年）²¹⁾であり、前述の香港に比べると低い。日本でも性別役割分業観に変化がみられ、ジェンダー観も見直されつつあるが、妻が家事雑事の大半を担当していることが実証され、育児や家事への夫の参加は少ない²²⁾²³⁾。また、日本の既婚女性は家事や育児を重視して、パート形態で家計の一部を補充する程度の就労が多く、仕事、家事、育児に対する姿勢に相違があると考えられる。しかし、日本の既婚女性も労働参加が増加しており²¹⁾、香港のように性別役割分業観にとらわれず、夫婦が共同で役割を遂行することが日本人家族においても必要かも知れない。

また、香港の少子化は、高学歴化と女性の労働参加を背景にした晩婚化・晩産化から生じている。地域住民との関係が希薄化し、核家族化により家族規模が縮小しているが、親族ネットワークやアマの存在により養育・教育機能を確保している。このように、香港では、親族やアマ、外食産業といった外部のサポート資源を活用して家族機能を遂行しており、日本人家族においても利用可能な資源の拡大が望まれる。日本では看護・介護分野でフィリピンやタイから外国人労働者の受け入れ²⁴⁾が決定されているので、アマのような家事労働者の導入も検討する余地があると考えられる。

本研究では、香港における子育て期にある家族の家族機能遂行の方略を明らかにした。スノーボールサンプリングにより選定された7家族は、家族員の年齢、居住地、収入などから子育て期にある平均的な家族から逸脱していないと思われる。7家族からのデータは、エスノグラフィーから得られた分析データの一部であるが、さらに家族からのデータを蓄積していくことが望ましい。今後もフィールドワークを継続して家族機能のアセスメントをすると同時に、家族機能レベルを量的に評価し、日本と香港の比較を行うことが必要であろう。

V. 結 論

子育て期にある香港人家族の家族機能として、【出生力の抑制による少産】【夫婦以外の人手による子育ての補完】【過熱する早期教育への取り組み】【夫婦間で均衡化した家庭内外労働の負担】【家事労働の夫婦外への委譲】【家計を圧迫する住居費・教育費負担】【生活を維持するための最低限度の住居】【居宅内を中心として繰り広げる娯楽の享受】【低い宗教意識からくる宗教の形式化】【日常生活で散見される健康意識】【生活習慣・環境に起因する健康問題の保有】の11カテゴリーが明らかになった。とくに、夫婦の家庭内外労働を均衡化すること、育児や家事を夫婦外へ委譲して家族機能を遂行することは、日本人家族においても検討していきたい。

謝 辞

本研究にご協力くださった皆様、香港理工大学の江黄潔芳先生、徳善幼稚園の胡蘊瑜先生、富士通香港有限公司の黎國良氏、國泰航空会社の勵文馨氏、元神戸大学医学部保健学科の寺坂美緒氏と山口沙世氏に深謝いたします。なお、本研究の一部は、科学研究費補助金（萌芽研究，研究課題番号17659691）の助成を受けて実施したのである。

〔受付 '06. 7. 5〕
〔採用 '07. 3. 9〕

文 献

- 1) 西村洋子：変化する社会と家族の役割・価値，学文社，東京，2004
- 2) 森岡清美，望月嵩：新しい家族社会学，培風館，東京，2003
- 3) Hohashi N., Koyama C.: A Japan-U.S. comparison of family functions from the perspective of mothers utilizing "family houses" —Cross-cultural research using the Feetham Family Functioning Survey—, Japanese Journal of Research in Family Nursing, 10 (1): 21-31, 2004
- 4) Chan H., Lee RPL.: Hong Kong families: At the crossroads of modernism and traditionalism, Journal of Comparative Family Studies, 26 (1): 83-99, 1995
- 5) Census and Statistics Department: Population census 2001 main report—Volume 1, Census and Statistics De-

- partment, HKSAR, Wan Chai, 2002
- 6) Census and Statistics Department: Hong Kong annual digest of statistic 2004 edition, Census and Statistics Department, HKSAR, Wan Chai, 2004
 - 7) Spradley JP.: The ethnographic interview, Wadsworth Thomson Learning, Belmont, 1979
 - 8) Spradley JP.: Doing participant observation, Participant observation, 53-62, Wadsworth Thomson Learning, Belmont, 1980
 - 9) 高橋強: 香港における家族問題に関する一考察—特に＜従来の家族認識＞批判を通して—, 可見弘明編, 香港および香港問題の研究, 59-77, 東方書店, 東京, 1991
 - 10) 瀬川昌久: 香港社会の人類学 総括と展望, 風響社, 東京, 1997
 - 11) 大橋薫: 家族機能の変化, 森岡清美監修, 家族社会学の展開, 163-180, 培風館, 東京, 1997
 - 12) Yip PS., Lee J.: The impact of the changing marital structure on fertility of Hong Kong SAR (Special Administrative Region), Social Science & Medicine, 55 (12): 2159-2169, 2002
 - 13) Pryde NA., Tsoi MM.: Hong Kong's children our past, their future, Center of Asian Studies, The University of Hong Kong, Pok Fu Lam, 1999
 - 14) Simpson PB.: Family beliefs about diet and traditional Chinese medicine for Hong Kong women with breast cancer, Oncology Nursing Forum, 30 (5): 834-840, 2003
 - 15) Chan-Yeung MN.: Air pollution and health, Hong Kong Medical Journal, 6 (4): 390-398, 2000
 - 16) Department of Health: Department of Health annual report 2000/2001, Department of Health, HKSAR, Wan Chai, 2002
 - 17) 沢田ゆかり: 香港 庶民の「食」の変遷, アジ研ニュース, 120 (1・2): 9-11, 1991
 - 18) 塩田長英: 比較現代世界の家族, 勁草書房, 東京, 1999
 - 19) 山田明, Lam L-Y., Tam JS.: 香港・淘大花園におけるSARS (重症急性呼吸器症候群) の流行, 人間看護学研究, 2: 97-98, 2005
 - 20) 横田淳: 総領事館はつとライン 第4回香港 SARS危機から得た教訓, 世界週報, 84 (34): 66-67, 2003
 - 21) 総務省統計局: 労働力調査年報 平成16年, 総務省統計局, 東京, 2005
 - 22) 目黒依子: ジェンダーと家族変動, 森岡清美監修, 家族社会学の展開, 211-221, 培風館, 東京, 1997
 - 23) 神谷治美: 家族間葛藤とジェンダー, 日本ジェンダー学会編, ジェンダー学を学ぶ人のために, 133-145, 世界思想社, 京都, 2000
 - 24) 松岡緑: 看護での外国人労働者受け入れについて, 教育と医学, 53 (3): 284-287, 2005

An ethnographic study on family functions of child-rearing households in Hong Kong: with a focus on the implementation of family functions

Junko Honda¹⁾ Naohiro Hohashi²⁾

1) Kobe University Graduate School of Medicine, Faculty of Health Sciences

2) Child and Family Health Nursing, Faculty of Health Sciences, Kobe University School of Medicine

Key words: family function, Hong Kong SAR, cross-cultural research, ethnography, child-rearing stage

This study was conducted with the objective of describing the family functions of child-rearing households in Hong Kong in terms of ethnography, and what implications it may suggest to Japanese households. Data on the family functions of the Hong Kong households were obtained from participant observation, interviews, statistical data and books.

From the data analysis, 11 categories were extracted. The burden of work in the home and outside was balanced between husband and wife, and shared by the two spouses. On the other hand, the delegation of external resources, including family networks, live-in "amahs" (foreign domestic helpers), restaurants and others, aided in fulfilling the family functions that could not be performed by the spouses alone. There were a dearth of births and over-enthusiastic adoption of preschool education, and the family budget was squeezed to pay for educational and housing expenses. The family lived in the minimum levels of housing to maintain their life, and it was clear that health problems originating in living customs and environment existed, while health consciousness was found in various aspects of daily life. Recreation was centered in the home, and while religion was utilized for actual living, it was perfunctorily practiced, indicating relatively low religious awareness.

Comparing the family functions of households in Hong Kong, the trend toward nuclear families, later marriages and fewer children, and participation of women in the work force has progressed to an even greater extent than in Japan, and we would like to consider how a balance of work is achieved between spouses in the home and outside, and delegating to outsiders tasks that could not be performed by the spouses alone.